

# 環境社会学と労働社会学の接点

堀畑（藤川） まなみ

海は青く、遠くに島々が見える。島々が連なる風景は瀬戸内海特有のもので、ゆったりした潮の音を聞きながら、誰もがのんびり過ごしている。そこには、自分で作った野菜や果物、米、自分で採った魚を通して四季折々の味覚を楽しむ暮らしがある。自然に親しみながら働き、毎日を過ごすことは住民のささやかな願いである。効率重視、合理性重視といった近代化の指標からちょっと離れた地域では、人々はゆったりと暮らしている。

香川県豊島でもあの事件さえなければ、こうした暮らしが守られていたはずである。あの事件とは、1990年11月に兵庫県警によって摘発されたことで明るみになった産業廃棄物不法投棄事件である。私は1996年12月に大学院生3名のグループではじめて現場を訪れた。廃棄物対策豊島住民会議の石井亨さんから豊島で現地見学会とシンポジウムの開催をするという案内をいただいたからであった。石井さんにはこの年の4月のアースディ市民国会でお会いしていた。マスコミの報道などから豊島にもともと興味があり、そのときに名刺交換をしていた。その名刺が連絡をいただけるきっかけになったのである。フェリー発着場にある交流センターをバスが出て、7分くらいすると狭い道に入り、さらに7分くらいで現場に到着した。こんな狭い道をトラックが廃棄物を運んでいたとは考えられないくらいであった。現場は、復土してあるために一見広い敷地に来たようであった。当時の現場に

は、所々に住民が廃棄物の様子がわかるように掘った穴があり、黒い水を湛えていた。廃棄物は5~6メートルくらい高く盛られ小さな丘のようになっていた。その5~6メートルの小さな丘の下、地平線よりもっと深くまで廃棄物は埋められていた。安定感のない廃棄物の上をあたりから立ちこめる異臭を嗅ぎながら歩いたことを今でもはっきりと覚えている。香川県のなかでも小豆島に次いで大きな島である豊島にとって現場は一部でしかないが、マスコミ報道から島の多くがゴミという印象を持っていたことを反省した。

約50万トンにも上る廃棄物の量でも圧倒されるが、もっと問題なのは捨てられていた場所と廃棄物の質であった。捨てられていた場所は、いわば海の中である。海砂を採取し、その上、山砂も採取し、山砂採取に際して出てくる粘土部分で海中に堰堤を築き、そこに次々と廃棄物を捨てていった。廃棄物は、シュレッダーダスト（自動車破砕くず）、食品汚泥、製紙汚泥、廃油などであった。シュレッダーダストは金属くずのみであれば危険性はないが、プラスチック類、ウレタン、ブレーキオイル、エンジンオイルなど、場合によってはバッテリーまでもそのままで破砕されるために鉛やPCB、砒素などのさまざまな化学物質を含んでいるのである。廃棄物は無理な積み上げで圧力がかけられ、さらに減量化のための野焼きによって、あたりから有毒ガスが発生していた。「これは、あまりにもひどすぎる」

というのが率直な感想であった。

1997年から環境社会学の研究として、大学院生5人で本格的な調査に乗り出した。はじめは被害と加害がどのようになっているのか、この問題が地域社会に与えた影響はどのようなものなのか、などが主な研究テーマであった。1993年11月に公害調停を豊島住民が申請してから4年目に入っていた。豊島はこの間にも大きく変わろうとしていた。自分たちの問題として自分たちの力だけで解決するという方向から、外部の人々の支援を受け入れる方向へと変化しているときであった。自分たちの問題として自分たちだけで解決するのは、この問題を恥と考え、外部の人が地域社会に入り込むことに慣れていない閉鎖的な社会であったからである。公害調停を通じて、住民側弁護士のリーダーである中坊公平氏の影響によって、住民は外部の方にこの問題を理解してもらうことが重要であると思うようになった。1996年12月に豊島を訪れるきっかけになったシンポジウムも、積極的に外部の方に来てもらうために開催されたものであったことを調査のときに石井さんから伺った。1997年の調査では、このように住民の意識が変化していたこともあって様々な方からお話を聞くことができたのであった。

この年の7月に中間合意が住民と県とで成立した。「豊島にて無害化の中間処理をし、島外にて処分する」というものであった。中間処理のためのプラントは豊島の廃棄物だけを扱うというものであった。中間合意では1978年に業者に対して起こした裁判にて住民が勝ち取った「十分な指導・監督」の約束を履行しなかった県の責任を認めておらず、謝罪はなかった。そのため、住民は県の謝罪を求めてさらに闘うことになった。2000年6月、最終合意が住民と県とで成立した。最終合意では県は責任を認めて、謝罪をした。廃棄物は

3キロメートル離れた直島にて無害化処理されることになった。中間処理プラントは豊島の廃棄物処理が終了した後も関西圏の廃棄物を受け入れる形で使用を続けることになった。現在、エコタウン構想と関連して直島の地域活性化と結び付けられて話が動いている。

不法投棄事件を解決させようと公害調停を申請してから、豊島住民は島の将来について真剣に考えることが多くなった。島には小学校、中学校はあるが高校はない。高校に通うにはフェリーで小豆島まで行くことになる。高校卒業後は、進学にしても就職にしても島外に行くしかなく、郷里を離れることになる。過疎化が進む島で若い人が島を出て行くことは、更なる高齢化を意味する。豊島では、高齢化率も高く活性化について模索中であるため、若い人が出て行くことは島の将来に直接関係する問題になってしまう。

こうした問題は過疎化が進む地域ではよくあることかもしれない。しかし、環境問題の被害地域にとっては、単なる過疎地域の問題以上にハンデを背負うことになるかもしれない不安がある。また、「はじめに環境問題ありき」としてフィールドに入った者にとってもフィールドワークが長くなればなるほど、じっくりと考えなくてはならない課題となる。

私は、大学院博士課程において環境社会学の研究と平行させながら、東京都立労働研究所の연구원として労働社会学の研究も行ってきた。「公害の被害は工場労働者にまず影響がでる」として、私の師匠である飯島伸子先生が立ち上げた労働衛生部門での研究をするためであった。都立労働研究所での研究は中小企業建設労働者の労働安全研究や、高齢者福祉施設で働く職員のバーンアウト研究などの労働衛生部門での研究だけにとどまらなかった。労働社会学者の育成という松島静雄所長の方針のため、国際労働部門や女性労働部門

の研究もさせていただいた。具体的には東アジアの国から日本に来ている人たちのサポート研究や、女性の能力活用とNPOの研究、東京都のフリーターの研究などである。

公害問題と労働問題の接点としての労働衛生部門は、第二次産業から第三次産業への転換によって固定発生源としての工場での労働は主流ではなくなったことから、すでに労働社会学と環境社会学は別々の道を歩んでいるという感じであった。いろいろな方から、専門2つは多すぎると言われたりしたため、当初はリンクさせることをいろいろと考えもしたが、研究をすすめるうちに環境社会学は環境社会学で面白いし、労働社会学は労働社会学として面白いからそれぞれ別々でもよいかもしいないと思うようになっていた。

気楽に2つの分野の研究をしていた私にとって転機が来たのは2000年1月であった。普段の研究分野が違っていたため労働研究所報に論文を書かずに過ごしてきたが、豊島のことを労働社会学の視点から書くように宿題が出てしまった。ちょうどその頃、豊島では若い人の雇用につながるようにと数軒の農家がイチゴ栽培を始めていた。豊島でのイチゴ栽培は「らくちん栽培」として腰をかがめずのできるもので、気候が温暖で豊かな豊島にとって、とても最適である。こうした動きは、一次産業の労働衛生の変化や、地域の雇用問題に関連したので、このことを書かせていただいた。

実は、豊島では中間合意後に豊島で豊島の廃棄物を処理する中間処理プラントをめぐっ

て、雇用問題と関連させた議論が外部によってなされていた。豊島に不法投棄された廃棄物の処理終了後も外からの廃棄物で操業を続けられれば雇用に結びつき、若い人の就労の受け皿になるというものであった。廃棄物問題で苦しんできた人々が廃棄物で食べていくということは当事者にとってどのような意味を持つだろうか。不法投棄事件発生以降につけられた「ゴミの島」というラベリングを取り除くことに必死になっている豊島住民は、当然これを拒否した。そのため、自立の道は自分たちで模索することを余儀なくされたのである。現在、イチゴ栽培だけでなく、豊島では環境教育の島としての活性化も検討されている。この2~3年、豊島では島に居たほうが都会にいるよりも面白いからと若い人が帰ってきたり、島の外から住み込んで住民会議の仕事をしたりする動きがある。東京都でフリーターの研究をすると、なんとなくフリーターをしている人が目立ち、定職についた方が良い気もするが、豊島では定職を超えた仕事のあり方が見えてくる。

豊島の事例をみると、フィールドワークを長く続けられれば続けるほど、地域社会にとっては環境社会的な視点だけでなく、労働の視点が必要になっていくことが実感される。環境問題としてのトピックスを、地域住民にとって問題はいつまでも続くことから、地域問題へとシフトさせて考えることが重要である。環境社会学と労働社会学の接点はここに見出すことができそうである。

(コア教育センター講師)